日本の名湯(六)　塩原温泉郷(栃木県)―新緑と紅葉の名所に個性豊かな11温泉地が並ぶ

塩原温泉郷は東京から関東平野を北へ約150キロ、栃木県北部の那須塩原市にある。山間部を西から東へ流れる箒川(ほうきがわ)が刻む渓谷や川畔に沿って11箇所もの温泉地が密集して並ぶ一大温泉郷である。11箇所の温泉地はその立地・自然環境、規模やたたずまい、そして何より温泉の泉質、浴槽で呈する湯の色など個性もそれぞれ異なり、とてもバラエティーに富んでいる。

その豊富な温泉資源の熱源となっているのは、温泉郷の南にそびえる高原山(最高峰1,795メートル)山系という火山である。山系のうち「新湯(あらゆ)富士」と呼ばれる富士山(標高1,184メートル)の北西斜面には今も白い噴煙を上げる噴気地帯があり、硫化水素のにおいが強くて湯の色は美しい青白色をたたえる高温の酸性硫黄泉を11箇所の温泉地の一つである新湯温泉に提供している。

新湯富士の噴煙を上げる噴気地帯(左)／新湯温泉の青白色の源泉（以下断りない限り提供：石川）

栃木県北部には塩原温泉郷を育んだこの高原山山系に加えて、7つの温泉地が集まる那須温泉郷を育んだ那須連山(最高峰1,915メートル)、日光湯元温泉がある日光連山(最高峰2,578メートル)と火山が連なっている。このため関東地方では群馬県北西部、神奈川県の箱根と並ぶ代表的な温泉密集エリアとなっている。

塩原温泉郷は新幹線や東北自動車道を利用すれば、東京から約2時間で行けるという交通の便利さもいい。関東平野に広がる田園地帯から国道400号線を西へ箒川の上流に向かって渓谷を分け入っていくと、風景は一転して目が洗われるようなグリーンシャワーを浴びる。モミジやカエデなど豊かな落葉樹林が渓谷を覆い、秋には絶好の黄葉・紅葉の名所となる。

門前温泉の無料公共露天風呂「もみじの湯」

この箒川に沿って順に並ぶ 11 の温泉地の特色・魅力を紹介したい。

塩原温泉郷の東の玄関口にあたるのが大網温泉である。箒川渓谷でも最も深い谷底に 1 本は自然湧出、2 本は掘削した源泉が 3 本あり、泉温は 48℃～64℃と高い。この源泉を上の国道沿いに建つ一軒宿まで引湯している。

宿のフロントで入浴料金を払って谷底まで歩いて下ると、宿が管理する男女別の露天風呂とコンクリ造りのトーチカのようなワイルドな野天風呂が迎える。谷間から天を仰ぎつつ、無色透明な中にもやや緑色がかったナトリウム・カルシウム–硫酸塩泉の源泉かけ流しを満喫できる。ただ、現在は落石を避ける施設工事中でしばらくは入浴できない。

大網温泉の男女別露天風呂（左）／谷底にあるトーチカのような野天風呂（右）

大網温泉に続くのが福渡温泉と塩釜温泉で、このあたりまで来ると渓谷は深くはなく、河畔一帯が開けてきてそれぞれ宿も数軒ずつある。周囲には民家も目立つようになり、観光客は入浴利用できないが地元住民専用の小さな「共同湯」の建物が路地奥に点在するようになるのも、温泉資源が豊富な塩原温泉郷の特色だ。

箒川に臨む塩釜温泉

二つの温泉地は泉質も大網温泉とは違い、「塩原」という温泉名にふさわしく、口に含むとわずかに塩味のする塩化物泉となる。さらに塩釜温泉から箒川の支流・鹿股川沿いに南に上っていくと、また深くなる渓谷に塩の湯温泉がある。二軒の自家源泉宿があって、宿の館内から木造の階段を 80 段くらい下った谷底に半洞窟風呂や露天風呂、内湯がこしらえてある。温泉名どおり泉質は塩化物泉だが、多様な成分を含んでいて湯の色は青味がかるか、薄黄緑色に色づいていて温泉愛好者を喜ばせる。渓谷を流れる水音しか聞こえてこない幽境で極上の湯に浸かっていると、世の中の憂さも忘れよう。

塩の湯温泉「明賀屋本館」の谷底露天風呂群。奥が半洞窟風呂

次に、塩釜温泉を過ぎて少し西に行くと、塩原温泉郷で最も開けて大きな宿・ホテルや公共温泉施設、商店街も連なる中心部に入る。ここに畑下(はたおり)温泉、門前温泉、古町(ふるまち)温泉、中塩原温泉、上塩原温泉と順に5つの温泉地が連なっている。とくに畑下、門前、古町の3つの温泉地はどこが境界かわからないほど隣接しており、門前温泉と古町温泉のあたりがいちばん温泉街らしい景観や情緒が楽しめるエリアだ。

温泉街は、門前温泉の温泉名の由来となった古刹・妙雲寺の門前町として発達したという。塩原温泉郷の歴史がどこまでさかのぼれるか文献からは確実ではないが、妙雲寺の創建の時期は14世紀の室町時代とされている。火山性の温泉資源の豊かさを考えると、それよりはるか以前から温泉は知られていたと思われる。

古町温泉街の饅頭屋(左)／箒川に臨む門前温泉の旅館のロビー

この5つの温泉地の主な泉質はやはり塩化物泉である。宿の多くが源泉かけ流しをうたうほど湯量が豊富なので、地元住民専用の共同湯以外にも宿泊客・観光客も温泉街散策の合間に入浴できる無料の公共露天風呂がある。

畑下温泉の離れ家の浴室露天風呂

箒川に沿って開けた温泉街を離れ、中塩原温泉から鬼怒川温泉方面と結ぶ観光道路「もみじライン」を通って高原山系の富士山麓へ上って行くと、最初に紹介した新湯温泉に着

く。温泉郷では最も標高が高く、夏でも快適な避暑地の気候条件である。泉質も箒川沿いの温泉地とはまったく変わり、酸性硫黄泉の湯の香と湯の色を楽しめる。

新湯温泉の魅力は、新湯富士の爆裂火口跡の噴気地帯の真下に源泉かけ流しの小さな共同湯が 3 つも迎えてくれることだろう。2 つは浴槽が男女別となり、一つは混浴である。うち伝承もあって最も古い「むじなの湯」は現在男性側に仕切られた浴槽の底奥から熱い源泉が自然湧出してくる。成分も濃密な湯なので、長湯は避けたい。

そして塩原温泉郷の最奥に位置するのが、塩原元湯温泉である。現在はそれぞれ自家源泉で自然湧出泉の泉質・成分も湯の個性も微妙に異なる 3 軒の温泉宿が並んでいるが、17 世紀に周辺で起きた地震で廃れる前は「元湯」の名のとおり塩原温泉郷で最も早くから開かれ、江戸時代前期には宿も 50 軒近くあって繁栄した温泉地だったと記録される。

塩原元湯温泉にある 3 軒の自家源泉宿の源泉の違いを入浴体験するだけでも面白い。「大出館」という宿の浴室には、硫黄泉の白い湯と墨を流したような黒い湯の二つの浴槽が隣り合っている。「元泉館」と「えびすや」には温泉に炭酸ガスが溶けていてプシューと湯口から間歇泉のように噴き出す浴槽がある。

塩原元湯温泉「元泉館」の硫黄泉の露天風呂（左）／「大出館」の浴室に並ぶ白い湯と墨湯

こうして塩原温泉郷には大分類でも泉質が 6 種類もそろう。この魅力と強みを地元の塩原温泉観光協会はよく理解しており、ホームページを通して「6 種 7 色 3 性質と多彩な泉質」を選ぶ楽しみをアピールし、該当する温泉地・温泉宿を一覧にして紹介している。

訪れやすく、しかも個性の違いがはっきりした名湯が 11 も並ぶ塩原温泉郷は、日本の温泉の持ち味をつかむには格好の魅力的な温泉エリアと言えよう。

入浴できる共同湯が多いのも塩原温泉郷の魅力（新湯温泉「中の湯」）（左）／新湯温泉の由緒ある「むじなの湯」では浴槽の板底奥から熱い酸性硫黄泉が自然湧出してくる（右）

文　石川理夫

【温泉地 DATA】

・所在地：栃木県那須塩原市

・アクセス：東北新幹線・JR 東北本線那須塩原駅からバスで 53 分～65 分

・泉質：大分類で６種類（単純温泉、塩化物泉、炭酸水素塩泉、硫酸塩泉、硫黄泉、酸性泉）

・泉温／pH：38～80℃／pH2.4～7.7

・源泉数／湧出量／湧出形態：約 150 本／毎分 9,000 リットル／自然湧出・噴気造成・掘削自噴・動力揚湯

・宿泊・温泉入浴施設：宿約 60 軒。共同湯 20 箇所以上。公共温泉施設 1 箇所。足湯も多い

・照会先：塩原温泉観光協会 TEL0287-32-4000